

検測通過通知

4月1日、父の63歳の誕生日を明日に迎え、私は論文の「検測」に通過したことを知った。この「検測」とは、論文の引用以外の引用が、論文全体の10パーセントを超えていないか審査するものである。

もし引用が基準を超えていた場合、訂正を加えなければならない。私は、参考文献がほとんど日本語の文献だったため、引っかけることはないだろうとは思っていたが、論文をオンラインで論文を提出したため、「提出完了」という実感すらあまりなかった。

4月1日、「また来たか」と陳先生に言われるのではないかとか、論文が通過していなかったらどうしようなど考えながら、緊張した身体で、歴史学部教務課の開いたままのドアをノックした。私が口を開く前に、「吉永英未、あなたの論文は検査に通過した。」と陳先生に大きな声で告げられた。嬉しかった。初めて、ほっとした。私は、お世話になった行政職員室の李先生、王先生にこの結果を伝えた。

論文を書き始めてから初めて、周りの人から「おめでとう」と言われた。あとから、論文を提出したのはクラスの中で三番目、無事に検測に通過したのは一番目、論文の厚さもほかの過去の学生の比べてとても厚かったと言われた。私はひとまず、お世話になった方々に一つの難関を超えられたことを報告した。

これからの審査

これからの過程として、論文は校内審査と学外審査にかけられる。校内審査は、すべての学生が、学内の副教授以上の先生方三人に審査をしていただく。そして、学外審査は、システム上で無作為に選ばれたクラス全体の10パーセント未満の学生の論文が学外に送られ、復旦以外の大学の専門を問わない教授の方に審査される。

このとき自分の名前、指導教員の名前、大学名も隠され、ただ論文のみが審査される。この審査は厳しく、わたしはただ、この極めて低い可能性で審査対象に選ばれ、私の論文が学外に飛ばされないことを祈るのみである。

この間、現在提出している初稿は修正可能で、万が一審査に通過しなかった場合でも、先生方のアドバイスのもと修正を加え、もう一度審査してもらうことができる。これらの審査を通過

ると、今度は5月末までに自分の指導教授を除く5名の教授のもと、（内一名は学外の教授）論文の質疑応答が行われる。

これに合格すると、論文は大学の論文判定委員会に送られ、6月20日前後に学位が渡されるのだ。最終的に、論文は復旦大学図書館のシステムに登録され、将来、一般公開されることになる。論文のキーワードや名前を検索すると、自分の論文が出てきて、誰でも、全国どこからでもダウンロードすることができるようになる。

この制度のおかげでわたしも、論文を書く段階で様々な大学のたくさんの方々の修士・博士論文及び学術論文を参考にさせていただいていた。いま、将来自分の論文が一般公開されることを思うと、ちょっとはずかしくも思うが、嬉しくも思う。

春のひかり

約一年間、論文執筆に奮闘した日々。好きなことも、やりたいことも、少しずつ我慢し、減らしてきて、最終的には論文だけを目の前に、毎日を過ごしてきた。4月1日に検測の通過通知を受けて初めて、やっとほっとすることができた。

4月2日、中国は清明節で、お墓参りをするための祝日である。私は、春艳と同济大学に桜を見に行くことにした。念願の桜を、もうすでに散ってしまいそうな上海の桜を見ることができると嬉しく思うとともに、支えてくださった方々に、感謝してもしきれない感謝のきもちで、胸がいっぱいになる。

無事に最終質疑応答に合格することを望む一方で、そのときにはもう、復旦を、中国を離れなければならないということも悟らなければならない。長い間目の前のことに一生懸命になりすぎて、いまはちっともここを離れるという実感がないのだが、少しずつ落ち着いて、残された時間、お世話になった人たちに、感謝の気持ちを伝えなければならない。そして、お別れをする準備も、しなければならない。

私が論文を提出した当日、親友に赤ちゃんが産まれた。13歳の頃から陸上部で、共に人生を「走って」来た親友。彼女の子供の名前が「ひかり」と聞いたとき、私ははっと彼女の笑顔を思い出した。私の母に嬉しそうに、結婚を報告する彼女の笑顔を。母は病室のベッドに横たわりながら、でも嬉しそうに彼女の幸せを祝福した。2年前、私の母がそっとこの世を去ったのは、寒い冬だった。今年の春、新しい命が誕生した。天国にいる母が、笑っている気がした。暖かい春の光を照らして。

2017年4月2日 本当は大好きな父の63歳の誕生日を祝福して

